

蚤御家

武徳照代日記

〇

九

庫文閣内		和	
一四九函	二一册	三三二〇號	
		内閣文庫	
		番號	和33120
		冊數	11(9)
		函號	149 111

135

第十一



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり



武德照代日記

慶長十九甲寅年

十一月大

廿七日

向ノ所ハ備前島ハ青屋口ヲ
去日遙ナラス元ヨリ彼兄弟
城内ノ地勢ヲ胸臆ニ存スル

故 台徳公 炮術ノ 御師 範稻
富伊賀守直入道一夢力弟平
左清門同姓太夫直次力門
弟宮内ヲ以テ國友張三貫目
ノ大銃ヲ發シ入レル所ニ届
ク更ナシ井上外記正繼ヲ以
テ重テ遣ハサシ大銃ヲ發セ
定ヌ玉カカニ遙城内ニ至リ



壘壁ヲ損フユハ敵再上今福
ハ發セス彼稻富平左清門ハ
尾陽忠吉卿ニ仕ヘ當時義直
卿ニ至テ炮術ヲ以テ世ニ鳴
喜太夫又精妙ヲ得ル取ナリ
此度井上ニ劣レルハ頗ル故
アルカ不審ノ由謳歌セシム
嚮ニ御使番安倍四郎五郎正

之斥候トシテ北中ノ島ハ数度
赴キケルカ今日平野ニ参向
之ケルハ本多正信カ曰北南
ノ中ノ島新家居曾根崎辺迄
水間ニ天満ニ向テ附城トス
ハキ取アルカト問正之地理
委ク演説之ケルハ正信渠ヲ
携ヘテ台徳公ノ御前ニ出テ

大繪圖ヲ披キ正之カ意味ヲ
具ニ言上ス時ニ昨日ニ大御
取ト謀リ玉フ処汝カ迷ルニ
違ハサル旨感セラレ其上寄
手ニ諸卒寒氣ヲ凌キ兼手負
多ク出来リ死没スヘシ是憐
ムニ堪タリ附城ヲ築キテ
兩公モ京伏見迄暫ク御内兵

来春暖氣又待テ當城攻ラレ
ヘキ間明日安藤對馬守重信
ヲ北中ノ島へ遣ヒ答トスヘ
キ地形ヲ監察セラルヘシト
テ重信ヲ召テ明日正之ヲ卿
導ト夕彼表ニ可至由ヲ命
セラレケルカ重テ正之ヲ召
テ餘大御所ト計ラセ玉フ附

城ノ場所ト汝力欲スル所ト
違ハサレハ汝一人相越答ノ
地能見分スヘシト御説ア
リ正之辞メ曰弱年ノ正之大
事ノ場所ヲ見究ムヘキト其
憚リアリ對馬守ト相伴ヒテ
往テ尚以テ地ノ理ヲ量ラシ
ト欲スル言上ス時ニ御許

容ナク正信明日住吉ニ至リ
テ大御所ヘモ正之ヲ以テ
附城ノ土地ヲ監臨セムル
赴可言上ト仰ヲ蒙ル
爰ニ馬喰力淵ノ辺阿波座
ニハ阿州ノ商客常ニ住シ今
度心ナラス城内ニ成今更遁
出ント欲シ寄年阿波ノ國

主蜂須賀至鎮カ許ヘ此辺ノ
外壘微勢ニシ其守リ固カ
スト告知スル故蜂須賀ハ其
聳池田宮内少輔力兵ヲ合セ
馬喰力淵並阿波座土佐座ノ
敵砦ハ海河ノ要路咽喉ナリ
依テ是ヲ拔ント欲スレ先
達テ兼取シ芦島ヘ馬喰力淵

ヨリ輕兵ヲ出シ叢葭ノ中ニ
伏置火炮ヲ發スルユヘ其功
ヲ遂カタシ彼島ヘ一將ヲ遣
ハサシ其伏茲ヲ追拂シシ
ヲ或兩公ヘ願フ嚮ニ藤田能
登守モ監軍タル故馬喰カ淵
等巡視シ飯リテ演ケルハ馬
喰カ淵ノ周回十丁ニ及ハス

方三丁ニ足ラス籠所ノ薄
田隼人正カ人数内ヲ取テ積
ル積ルキハ二千八百計外ヲ取
テ積ルキハ二千六百計ニ
過ハカラス薄田ノハ信吉往
年時々ニ參會セシハ剛強ニ
少野鄙也假令刀ノ柄ハ蓬々
共自釘サテ強ク鞘ハ珉ノ莖

夕日氏刃廿八銳利十七八善
小法入此風俗氏々或ハ力三
元斬夕九毛棒云テ打殺感夕
此天畢竟勝公同之下計リ旗
竿於曲レレ氏鎗ハ揃ハス氏
油断セ又力肝要ト謂ハレ類
白者ナレカ今度内旌旗ヲ麾
定若シ力其レ上替寄年ヲ怒

夕レ二洞究一死レ此大形其身ハ
月三詭之城内ハ律方ルカ本
多出雲守部下ハ真田仙石秋
田松平新庄且浅野采女正カ
騎士三百三十雜兵小荷駄ヲ
除キテモ五千アリ是又率テ
一責ニ陷サレテ請ク其處也
千賀孫兵湧重親モ又巡視シ

住吉三至山穢多村ノ近辺六
ヶ所ニ船橋ヲ設テ往来輒シ
テ其吉ヲ述ルニ神君永井直
勝水野勝成ヲ以テ穢多力城
ヨリ新家居造ノ道筋可見分
由命セテ水野力部下堀
丹後守直寄氏相從テ三久巡
視ノ歸參彼道筋ノ様子其辺

ノ川ノ深サ堤防等且博勞力
洲際造リ堤ニ高ク井樓ヲ了
クハ趣言上ス山岡主計頭景
以テ又歸リ来テ野田福島ニ
敵軍七八千屯スル由ヲ達ス
神君明日百騎計ヲ携ヘ御巡
見下ルヘキ由ニテ直勝勝成
ヲ遣ヒ馬喰力洲砦ノ川端ニ

仕寄ヲ付夫ヨリ大銃ヲ祭ニ
彼井樓ヲ打崩スヘキ旨仰
ケレハ右兩將ニ堀丹後守相
添テ川端ニ仕寄ヲ附勝成ハ
砦ノ敵今宵川ヲ越テ此仕寄
ヲ取トキハ明朝味方此表迄
至リ難カルヘシ勝成爰ニ叱
スヘキ間直勝ハ住吉ニ越テ

其旨ハ台聞ニ達セラレハ
ト云ヘリ堀丹後守モ勝成ト
共ニ爰ニ在ニト望ミ又リ然共
直勝許容セサレハ勝成モ共
ニ住吉ニ歸リ右ノ段演説ス
蜂須賀カ陸地ノ士大將中村
右近ハ住吉ヨリ永井水野來
テ仕寄ヲ附テ上ハ明日黎明

ヨリ必定勝成木馬喰力淵ノ
砦ヲ拔入ニ先スルニ不如ト
テ今宵馬喰力淵ノ前提ニ仕
寄ヲ附ル
真淺野但馬守長晟頃日今宮
ニ向ヒケルカ聊カ勵ニ戦ス
ヘキ体ナケルハ城中へ内応
セシムルヤト謳歌ス依之此

間木津ト今宮ノ間ニ屯スル
仙臺政宗ヲ以テ淺野カ後陣
トシ仙波ト木津ノ間ニ陣ヲ
移シ鐘木橋ニ向フヘシト御
下知アリシカハ政宗則陣替
シテ其夜謀者ヲ以テ仙波ノ
制策ヲ取テ是ヲ獻ス或時政
宗城外ヲ巡視シ火炮ヲ來ル

ニ及テ馬上ニ身ヲ縮メケル
力甚タ恥テ歩行之堀際ニ至
テ城炮甚タシク来ルトイヘ
氏敢テ駭カス暫ク堀底ヲ見
テ歸リ去ト云々

廿八日 神君御在陣ノ旁
ヲ犒ト 勅使トノ廣橋兼勝
卿西三條實條卿下向ノ告有

故住吉ヨリハ板倉内膳正平
野ヨリハ阿部備中守ヲ以テ
小濱光隆カ船ヲ遣ニ是ヲ迎
ヘラル

諸軍糧米ヲ增益ニテ是ヲ
賜フ凡三十万人ノ量一日ニ
千五百石充但ニ遠國ノ勢ハ
其一陪ヲ授ケテル

先達テ秀頼ノ方ヨリ東武
福島正則へノ使兩森三右清
門蒲生下野守へノ使岩瀬長
兵清ハ今日無恙大坂ニ歸リ
入ニトスル処ニ蓮花寺村関
長門守一政カ屯ニ於テ三人
ニ取籠レシカ兩森岩瀬奮テ
戦ヒ三人ヲ斬テ鼻ヲ欠テ城

中ニ至ル秀頼大ニ感テ故太
閤ノ威ニ置レシ金札ノ鎧ニ
領充ヲ二士ニアタフ
野田福島辺ニ神君御巡視
アルヘシト昨宵ヨリ炮卒三
百人ヲ彼所ニ遣ハサレテ
カ今日勅使到着ニ依テ
御出馬ナク本多正純成瀬安

藤ヲ以テ巡視アラシメ玉フ
嚮ニ永井直勝水野勝成カ見
積ルニ違ハスト云ヘ凡芦島
ハ多勢備ヘカ夕夕譜代ノ部
將微勢ヲ以テ守ラシメ玉ハ
ニ午薄クメ危キ旨歸リ報ス
于時石川主殿頭忠継ハ逼塞
免許ニテ出陣セシカ厚恩心

肝ニ銘シ且ハ實父カ虚名晴
甘ニ為ニ芦島ニ往テ守ラシ
ト欲シテ兩公ヘ是ヲ訴望ス
永井直勝則披露シケレハ其
忠志ヲ御感アリテ是ヲ許
シ玉フ
廿九日石川主殿頭忠總
其兵二千三百人ヲ率ニテ芦

島ヲ取敷所海河ヲ請タル早
湿ノ地ナレハ潮差入レカ共
少シ高キ所ヲ本陣トシ芦葭
ヲ蒞棄サセ士卒足ヲ水ニ浸
シ終夜馬喰カ淵ノ敵ノ砦ハ
火炮ヲ發シケレハ敵敢テ芦
島ハ出ルコトナシ池田忠雄カ
從士北川久太夫唯一人小船

ニ棹サシ馬喰カ淵ヲ監察シ
ケルカ砦ノ内ヨリ是ヲ見付
打掛ル火炮甚ク繁ク身ヲ屈
スル内ニ汐干テ船動カス北
川身ヲ縮メナカラ腰ヨリ炮
玉十計取出シテ砦ヨリ火炮
ヲ發スル度ニ川ノ中ニ投
入テ見セケレハ敵ハ目當下

リテ川へノミ玉陥ルト察之
筒先ヲ揚テ殺シケレハ玉ハ
悉ク船ノ上ヲ越テ北川唯十
ク汐満ルヲ待テ漕歸ルト云
是日薩州少將家久カ使
者伊集院半右衛門住吉ノ御
陣營ニ至リ去ル八月下旬大

坂ヨリ川北四郎左衛門ヲ薩
州ニ下シ正宗ノ脇差ヲ贈リ
家久速ニ渡海シ秀頼ノ下知
ニ応シ戦功ヲ遂ヘキ旨ヲ告
グル于時家久ハ大野兄弟ホ
ニ書ヲ報メ曰去ル庚子ノ秋
父兵庫頭義弘大坂ノ令ヲ守
リ石田ニ属ス是偏ニ祖翁義

久入道竜伯力大御所へ前
盟ヲ背クノ罪遁ルニ所ナク
當家ノ安危爰ニ究マルト云
へ氏適ニ御兩君ノ恩惠ニ
依社稷ヲ失フニ至ラズ往時
義弘ハ秀頼主ノ令ヲ守リ戦
忠ヲ伏見関ヶ原ニ竭ス今家
久ハ庚子ノ大御所ノ厚情

ヲ仰キ今度軍功ヲ著シ其万
一ヲ報セニト欲スル由ヲ称
シ彼脇差ヲ歸シ遣シ家久既
ニ纜ヲ解テ海上ニ浮フ近ニ
當表へ入津スヘキ由言上ス
或曰薩州ニ川北下向スル
時彼家ノ群臣評議ヲ凝ス
処秀頼ニ属セニ其義ニ當

ル歟ト称之或ハ庚子ノ乱
當家存亡爰ニ究ル処ニ
大御所ノ寛仁ニ依テ禍ヲ
免ル其恩最モ渥シ何ソ是
ニ叛ニト称シ或ハ川北カ
来ル若クハ駿府ヨリ其人
ト偽テ謀書ヲ投シ薩州ノ
志ヲ探リ玉フテモ量ルハ

カラス其實否ヲ知テ後返
酬ニ及ニテ可ナラニ歟ト
称シ一決スルニ至ラヌ爰
ニ義久入道竜伯カ養子兵
庫頭義弘入道惟新関ケ原
ノ役在大坂ノ三成ニ与ス
ル故乱後竜伯是ヲ義絶シ
ケレハ頃年洛陽ニ寓居シ

ケルカ今度鹿兒島ニ下向
スト云へ尺竜伯對面セス
然レ尺此一件ハ島津家ノ
存亡爰ニ究ムルナレハ
竜伯人ヲメ兵庫頭入道ニ
告テ曰庚子ノ乱足下既ニ
秀頼ノ為ニ忠ヲ致スヲ以
テ大御所ヨリ罰セラレ

内へキ処ニ恩許ヲ以テ社稷
ヲ失ハサレ報酬今爰ニ遂
ニサラニヤ既其理判然タル
上ハ又此上ニ何ノ評議ヲ
凝スヘキ家久ヲメ早夕舩
艤ニ唯波へ渡海ノ大御
所へ忠戦ヲ竭サシムヘシ
ト申之遣ハシケレハ維新

一言ニ及ハス義服ニ群臣
皆竜伯力此義論ニ屈伏ス
ト云々
福島備後守力屯ニ来ル秀
頼ノ使節力十指ヲ切テ逐返
之彼投スル印章ヲ使神君へ
献ス然レモ福島父子城中へ
内忘レ籠城以前モ糧米ヲ秀

頼へ献スル誹リ陣中ニ喧
キ故備後守態ト城内ニ乞
テ使ヲ出サセ異心ナキヲ
頭ハサニ為ニ十指ヲ断テ
追歸スカト云々
宇都宮家説ニ治部左衛門
未房旧好ノ浪士五百七十
八人群参ノ由上聴ニ連

スル処去ル朔日以来七百
人分ノ月俸ヲ賜フ且大台
徳公へ未房力傳へ奉ル大
坂城中へ御矢入ノ射法今
廿九日一合徳公躬ツカフ
是ヲ遂行ハルト云々
或ハ島津以下鎮西ノ諸侯
秀頼ノ調略ニ依テ猛勢大坂

へ渡海スル巷説アリ却神君
ハ御使番ノ族ヲ召テ攝州木
津ヨリ泉州界津迄ノ間大船
繋クへキ湊アルヤ監臨スへ
キ由御説アリテ各席ヲ去
ニトスル時汝等船繋ノ湊ヲ
察知スル所以ヲ心得タル歟
ト尋サセ玉フ各黙然タリ干

時御氣色損シ玉上凡ソ船ヲ
繫碇ハ見積ル法アリ或ハ入
江或ハ湊ニ非スノ濱近キ碇
ニハ船繫クテアタハス潮ノ
干潟ニ船ヲ留シハ俄ニ着岸
スルコトヲ得ス又急ニ海上ニ
押出スコトモ叶ハサル者也湊
ヨリ五間船ヲ押出ス時於陸

ヨリ又船ヲ押留ルコトナラサ
ル者ナリ入江渚ノ浅深砂石
泥造モ心ヲ用ユル所以ヲ知
スシテ何ヲ以テ見分スヘキ
ト委細ヲ教ヘラレ大槓ノ
使番モ相副テ往ヘキ由ヲ
命セラレ故彼来ルヲ待テ
レ凡一兩日過テモ来ラサレ

八神君ノ御使番巡視シテ
歸參シ木津ヨリ界迄ノ間ニ
ハ船繫ク湊ナキ段言上ス然
シテ大榭ノ使番ヲモ携ヘ
テ往ケルカト問ハセ玉ヘハ
奈何ノ力大榭ノ御使番遅
參シ路次ニテモ往遭サレ旨
言上ス神君ハ弱年ノ奴原

ニケ様ノ下見習ハセニト相
副往ヘキ由ヲ下知スル処ニ
遅退スル旨不届ク至御怒リ
リシト云々
五晦日松平周防守岡部内
膳力組山陽道ノ勢長柄川ヲ
渡リ天満表ノ川辺ニ進ニテ
仕寄ヲ附ルト云々塩町通り

二向ヲ惣構西南ノ角櫓ニ發
堂高虎仰ヲ蒙リ大銃ヲ發
シ城兵ヲ却カス福島備後守
正勝毛利長門守秀就力夫卒
ヲ以テ春日井堤ヲ築切ヘキ
旨松平主殿頭忠利片桐兄弟
ニ命セラル是先日伊奈筑
後守忠次ニ此ヲ諭シ玉フ

処今ニ於テ其功ヲ遂サレ故
今日忠次ヲ召テ其怠慢ヲ
勵ニ怒ラセ玉フ故ニ右ノ御
沙汰ニ及フト云々
石川主殿頭芦島ノ洲崎迄
出張セシカハ馬喰カ淵ノ井
樓ヨリ薄田力兵火炮ヲ發ス
ルヲ兩脚ノ如シ石川力実父

ヨリ譲リ之金ノ蝮ノ捺物ニ
モ忽火炮七ツ中リ從士死傷
スル者多シ馬驗ヲ持之者モ
胸ヲ打貫シ死シケル忠總力
伯父大久保權右清門忠為ハ
參州以來忠勇ノ稱アリシ力
當時彼後見トシテ頻ニ制シ
ケル力忠總肯ハス急ニ攻テ

馬喰力淵ヲ抜トス然レモ
潮差入テ水深ク馬共ハ住吉
ニ殘シ置ユ人渡スヘキヤナ
シ時ニ燒損シタル小船一艘
流シ来ル石川力臣平手市之
丞中黒弥兵清神田九兵清大
河内左右清門坂部与五左清
門塩屋源五郎淺井佐治右清

門坪井七郎兵清是ニ取乗鎧
ヲ棹ニメ一番ニ砦ニ乗込續
テ船少ニ流レ来リ大久保忠
為等是ニ乗テ渡ル折柄九鬼
氏ヨリ扁船ヲ送り貸ケルハ
忠總悦ニテ是ニ浮ヒ閲干諄
テ押渡ル敵ハ要害ヲ頼三油
断セシ故忽チ狼狽ニ右往左

往ニ落行テ石川一番ニ本町
ヨリ北ナル上馬喰カ淵ヲ乗
取土佐座へ走ル敵ヲ多ク追
撃ス又本町ヨリ南下馬喰カ
淵へハ陸ノ方ヨリ蜂須賀家
ノ中村右近海手ヨリ同家ノ
船大将森甚五兵清其子甚太
夫同友兵清亦押寄ケルカ石

川勢ニ先ヲ越レテ憤リヲ含
テ中村右近砦ノ前ナル河ニ
飛入処水深ク長ク立サリケ
レハ曹ヲ拔捨槍ヲ浮ニ十三
泳キ渡リ砦ノ堀際ニ附ケル
比森甚五兵衛父子頻ニ下知
メ砦へ船ヲ乗寄攻入テ廣田
嘉兵衛森長左衛門首級ヲ得

夕リ至鎮ノ聳池田忠雄力臣
箕浦右近ハ此所ノ敵方ノ番
船ヲ乗取同人家臣横川治太
夫先登メ砦へ乗込取ニ堀裡
ニテ大野主馬力組小川四郎
右衛門森甚五兵衛ト鎗ヲ合
セ森敵ノ鎗ヲ敲キ落シケレ
ハ小川ハ軍此場ニ限ルハ力

ヲス詰ノ城ニテ力戦スヘシ
ト罵リテ退ク処森ハ尚返セ
ト呼ハル四郎右衛門立
留リ本城ノ大吏ヲ忘レ砦ノ
小迫合ニカハハラニヤト称
メ静ト退キケル体勇鋭掲
馬タリ其餘ノ敵兵敗北ス平
子主膳貞詮ヲハ横川治太夫

是ヲ討捕其子茂兵衛モ命ヲ
失フ此地ハ乾ニ大河ニ流ア
リ西ハ芦島南北ニ堀アリ東
西ヲ虎口トメ強カノ誉アル
薄田兼相ヲ部将トシ大野主
馬カ兵六七百ヲ以テ守リケ
ルカ今宵薄田仙波ハ潜ニ往
テ遊宴ニ從軍皆嶮地ヲ憑ト

之懈テ甲冑ヲ着ニタル者モ
希ナル体也ケレハ石川ト蜂
須賀カ為ニ上下ノ馬喰カ淵
ノ兩砦忽陥リ薄田劫弱ノ汚
名ヲ得ル取也然レ夜ニ入蜂
須賀ハ阿波座へ石川ハ土佐
座へ衆入終ニ此兩砦ヲ陥ス
ト云

爰ニ池田左清門督忠継ハ
矢野兵庫佐布利九之丞ヲメ
蜷江ノ地ノ利ヲ伺ハセケル
ニ左右沼ニテ前狭ク末廣ク
取敷ニト危フシト云フ又丸
山豊後由井伊豆渡瀬淡路ヲ
遣ハス処歸リテ曰忠継ハ敵
出テ戦ハシトヲ欲セラレ幸

此所敵出テ防戦スヘキ地勢
ナリ吾奇兵ヲ出シ會釈ニ敵
ヲ足長ニ偽引出シ正兵ヲ以
テ鏖ニ討取玉ヘ内ニ好ニ玉
ヲ如ク敵出テ戦フヘキ間疾
ニ蜺江ノ地ノ利ノ嶮ナルニ
泥ニス軍ヲ發メ攻玉ハ武
州利隆モ恠ヘ兼後陣ニ續キ

玉ハ然ラハ兩家ノ大軍ヲ
以テ必勝掌ノ内ニ存ヘシト
云ニ忠継大ニ其詞ヲ善トス
其上忠継ノ相備戸川肥後守
達安花房助兵清職之父子新
家居ニ屯ニ連日野田福島ノ
敵ト堤ヲ隔テ火炮ヲ以テ相
挑ニケル力敵ノ兩砦ヨリ蜺

江村へ糟藁ヲ取ニ遣ス
戸川カ方ニ告ル者アリ達安
伏兵ヲ置テ甲士三人ヲ斬テ
首級ヲ住吉へ献スルノ後老
功ノ花房助兵洩敵ノ砦ヲ熟
覧スルニ旌旗動揺セヌ烟僅
ニ登リケレハ必定人数ヲ引
取見セ旗ナルヘシト諒者ヲ

以テ帰り来リ敵野田福島ノ
兩砦ヲ拘ヘ兼テ疾ニ人数ヲ
引取旌旗ノミヲ飾リ置告ヲ
述ル早速此告ヲ忠継ニ告ケ
レハ左洩門督依然トシテ戸
川花房ヲ先魁トシ今曉ヨリ
風雨ヲ凌キ水陸ヨリ蜆江ニ
進ニテ野田ノ砦ニ至リ堀ヲ

破テ乱入スル处大野カ部下
小倉作左濤門行陰カ弊疾ニ
引取テ軍士一人モナシ戸川
等船ヲ進メテ上福島ニ赴ク
其西ノ方ノ入江ニ大野治長
カ軍士大船二艘ヲ繫キ置テ
衛護シケルカ戸川花房亦相
進ミ戸川カ士岸原某件ノ船

ヲ乗取干時九鬼千賀向井等
ノ水軍進ミ来リ其船ニ乗移
ル岸原ハ此二艘戸川カ方ニ
得タル所ニ理不盡ノ所為早
ク退去セラルヘシト鎗ヲ揮
テ罵ル肥後守是ヲ見テ此船
凡一番乗ハ予カ從士也然共
水上ハ船手ノ司ル所ナレハ

トテ則ニ艘氏ニ是ヲ渡シテ
上福島ヲ放火ニ敵ノ首七級
ヲ得テ福島ニ屯ス抑左滄門
背忠継カ勢七千余ト云ヘ氏
土地廣ク左右ニ川ヲ帶トシ
退ク味方ヲ離シ甚夕危フシ
先達テ辰ノ刺安倍四郎五郎
正之ハ神崎ノ武藏守利隆カ

氏ニ至リ地圖ヲ畫シ築山ニ
登リテ見レハ戸川達安等先
登シテ備前勢蜺江村ヨリ野
田ニ赴キ棄取体ナリ利隆指
差テ是救フハキノ時也ト云
ヘ氏當手ノ監軍城和泉昌茂
頻ニ制スルユヘ踟蹰ノ憤激
限リナキ由ヲ述ル正之則和

泉ヲ諭シケルハ第一忠継ハ
昆弟ナレハ利隆是ヲ救フ
道ナリ弟ニ備前備中勢深ク
敵地ニ入テ敵ノ為ニ敗ラ
ル時ハ千悔ス凡益ナカル
之却テ兩大君ノ台慮ニモ
叶フヘカラス弟ニ忠継ノ一
部ノミ勝リテ得テ野田福島

ヲ拔テ是ヲ取敷ハ利隆必怯
弱ノ汚名ヲ蒙ラニ早ク兵ヲ
進メ弟忠継ヲ救ハセヘキ旨
諫メケレ凡昌後生得雅意ヲ
立甲越ノ小迫合ノ其格ニ泥
ミテ敢テ是ニ應セヌ安倍齒
ヲ嗑テ席ヲ去上福島ニ至リ
戸川達安ニ對面ス時ニ此隊

へ監軍ノ輩来リ備前備中勢
ヲ遙カ跡ナル蜺江迄引取セ
ント欲ス正之甚タ然ルヘカ
ラス敵既ニ此外壘ヲ弃テ兵
ヲ置ナル時ハ寄手ヲ恐ル、
ノ證據顕然タリ必爰ヲ退ク
トナカレト戸川モ又上福島
ノ地ヲ引取テ存命ノ内ハス

へカラスト誓テ左清門督カ
軍卒ト氏ニ爰ニ屯ヲ設ク然
ル所ニ老臣本多上野从ハ諸
部ヲ按檢シテ歸参ニ神君
ヘ言上シケルハ南方天王寺
表ノ味方既ニ城近ク逼リ東
方ハ鷺島ノ方モ惶際ニ仕寄
処神崎表ヨリ向テ池田武藏

守加藤式部少輔山内左助後
騎未夕長柄川ヲ越サレ音ヲ
述ルニ依テ神君此輩カ今
朝備前備中勢野田福島ヲ破
リ深ク要害ノ地ニ入処ヲ救
ハサレ故ヲ按問セシメ玉フ
諸將皆軍監城和泉カ勲ニ川
ヲ越ヘカラス敵ノ動靜ヲ見

届クヘシト下知スル故也ト
御使成瀬安菴ニ陳謝ス成瀬
隼人正安後帶刀夫ヨリ淺野
但馬守カ今宮ノ陣ニ至リ其
地ニハ兵ヲ殘シ早速野田福
島ニ至リ備前勢ヲ救フヘキ
御旨ヲ述ル夫ヨリ野田ニ着
シ忠繼及戸川カ先登ノ功ヲ

褒セラル由達シケレハ各掌
ヲ拍テ歡喜シケル斯テ淺野
長晟ハ即尅大船十余艘ヲ癸
シ旌旗ヲ靡カセ金鼓ヲ響セ
野田福島ニ至ラント馬喰カ
淵迄臨メリ早味方ノ大軍兩
所ニ押渡リ充滿セシカハ其
目淺野左活門ヲ以テ戸川花

房ヲ救ヒ長晟ハ海上ニ船ヲ
浮ヘ敵再ヒ野田福島ノ地ニ
出ハ戦ヲ遂ヘシト欣悅斜十
ラズ頓テ成瀬安藤ハ仙波口
ノ石川主殿頭カ大銃ヲ發シ
堀櫓ヲ打崩セハ城中ヨリモ
火炮ヲ放テ味方死傷若干十
ル処ニ赴キ昨日ノ大功ヲ

御感アリト云へ斥敵地ニ深
入シテ死ニ陷ントスル下甚
夕御旨ニ応セズ早ク上馬
喰力淵迄引取へシト下知ス
石川忠總力曰如斯仕寄テ向
ノ堀ヲ大畧オ崩シ棄入シト
スレ斥御諛黙止力夕下ト
テ成瀬安着ト共ニ暫ク攻口

ヲ退キケル力兩使歸リテ後
又張出シ夥シク大銃ヲ發セ
シム神君忠總力氣象一定
引取へカヲサレヲ察シ玉上
滝川豊前守忠往近着石見守
秀用ヲ以テ騎士四十輕卒二
百人ヲ遣シ石川ヲ救ハセ玉
ヲ是味方川ヲ隔ツル處忠繼

ノ三城邊ニ進ム故城ヨリ夜
蒐セシカトノ御思慮ナリ忠
繼大ニ悦シテ火炮ニ通りヲ
放サセ夫ヨリ援兵ヲハ後ノ
川端ニ備ヘサセ吾輕卒ヲ前
ニ列シ終夜火炮ヲ祭セシム
安倍四郎五郎五分一ト云フ
所ヨリ爰ニ来リ又此所ヨリ

シテ九鬼小濱向井千賀カ水
軍ノ体ヲ監察シ且備前備中
ノ勢深ク味方ヲ離レテ敵地
ニ入リ云ハ氏海西ノ諸軍カ
續テ是ヲ救ハサレテ神君
ノ御昔ニ忘セサル故ヲ聞ハ
須臾モ遅ラセス後軍忽チ野
田福島ニ至ラシテヲ量リ正

之平野ノ御陣營ニ歸參シ
台徳公へ其按檢スル赴演説
シテ侍座スル处へ本多正信
往吉へ御使ニ往テ歸リ相續
テ土井利勝ヲ位吉ヨリ歸參
シ海西ノ諸將備前備中勢ヲ
救ハサルヲ神君ノ怒ヲ
也玉ヲ由テ聞テ忽チ諸將野

田福島ニ押渡ル昔言上ス其
赴只今四郎五郎力推察メ
台聞テ歴ルニ聊モ違ハス
台徳公感メ宣フハ汝始テ戦
場ニ臨テ其工夫ハ殆卜老功
ノ士ニ劣ラズト称シ玉ヲ心
之今夜仙波天満ノ敵可引取
上云々ナリ正信其故ヲ問ハ

正之察スル所第一ハ上福島
ヲ攻ル備前勢七千ニシテ後陣
ノ續カサルヲ敵知サレテ以
テ其愚昧論スルニ及ハス第
二敵是ヲ知テカテ戦ハス
ハ弱敵ニシテ恐ルニ足ス第
三備前勢ヲ味方ノ諸將救ハ
サレテ大御取御怒ノ由ヲ

聞ト均シク吾軍中津川ヲ越
テ南中ノ島ニ押渡ル形勢ヲ
見ルニ於テ八仙波天満ノ兩
砦ハ然ニ壘壁ノ設ケテ大
河ヲ後ニシ橋橘寡ナケレハ死
地ニ陥リテ大軍猛勢ニ圍
レシテテ恐レサレニヤ守
ニ堪スノ夜陰ニ城中へ引取

ニ款ト云ヘリ 台徳公汝カ
察スルニ遣ハサラント 御
誕アリ本多土井ノ良材未モ
正之力量ル所理ニ當リ且詳
カナル旨ヲ称羨ス 神君住
吉ノ御陣營ヨリ花房助兵清
職之カ季子榊原左清門職直
彈後飛守ヲ遣ニ花房父子カ功ヲ

賞セラルル城中ニハ馬喰カ淵
阿波座土佐座ノ四塔ヲ破ラ
レ淺野カ戦艦ノ来ルニ驚キ
列將會議ニ殊ニ大野治長ハ
後茲又兵法ニ向テ敵四塔ヲ
拔テ氣ニ乗テ竟ヒ近付天満
仙波モ其地廣ク持味ヘカ夕
ニ彼外壘ノ兵ヲ惣郭ノ内ニ

叔公へキ歎後藤力曰往昔籠
城ノ法郭内ノ廣キヲ不可ト
スルヲ以テ始ヨリ予力欲セ
サル所ナレハ早夕自焼スヘ
シトテ森豊前守ト氏ニ天満
仙波ニ至リ地下人商賈悉ク
城中ニ入ヘキ旨下知シケレ
氏闇夜目サス氏知ス若干ノ

雜人途ニ迷ヒケル処ニ後藤
森馬ヲ馳テ数万ノ人家ニ火
ヲ發シ焼立ケレハ烟ニ咽ニ
テ死スル者其數ヲ知ス寅ノ
尅石川主殿頭力注進ノ使平
野ニ至テ天満仙波ノ敵自焼
メ引入由言上ス台徳公安
倍正之ヲ陣所ヨリ召メ石川

方ヨリ如斯告アリ曾ニ汝力
量リ察スルニ聊カ違ナシ汝
初陣ノ觀察如斯的中スル
不識ノ才也ト感セラレ本多
正信モ渠弱年ト云ハ氏連カ
四郎兵衛忠政カ子タル由ヲ
称ス天満仙波ハ商家花麗瓦
ヲ列スル故火甚夕熾ニニメ

明日ニ至ル後藤又兵衛力日
池田家ノ備前勢覺テ天満ニ
入ニ壯士等烟ノ下ニ伏テ不
意ニ發シ高名スハキ旨下知
シケレハ壯勇ノ士爰彼コニ
伏ケルカ備前勢乱リニ攻近
付ヲ十ケレハ悉ク後方カ武
功ニ誇リ勲心ノ下知ヲ十ヌ由

嘲ル色ヲ見テ又兵法カ曰何
一モ時ニ依テハ其積相違ス
備前勢必附入ニスヘキ処疑
議スルニハ故アルヘシ忠継
ノ相備ニ花房助兵清カ未夕
存生ニテ来リケルカ然ラハ
渠カ異見ヲ加ヘ夕ラニト云
ヘリ果ノ然アリシト云々
倍安

正之カ事蹟ハ
則被家説ナリ

或曰薄田隼人正ハ馬喰カ
淵ヲ蜂須賀ニ乗取レ憤リ
甚シク殊ニ城中ノ列將大
ニ嘲リケレハ森豊前守ニ
向テ今夜蜂須賀カ屯ヲ討
破ルヘシ足下後陣タルヘ
シト云フ森カ曰予ハ新座

ノ士其勢然王僅三百十レ
ハ先鋒勿論也隼人ハ多勢
ノ士十リ是後軍タルヘキ
所以也予何ソ後陣ニアル
ヘキヤトテ承引セサレハ
薄田血氣ノ勇衰ヘ其ノシ
點止スト云々
當臘月東西交和整テ後戸

川弥左清門カ陳所ヘ城ヨ
リ旧友後藤又兵清ヲ招キ
宴會ス于時後藤問ケルハ
今度城ヨリ天満仙波ノ外
壘ヲ自燒シ其兵ヲ惣曲輪
ノ内ニ引取シ時何トテ備
中備前ノ勢城兵ヲ慕ヒ撃
サレヤト云フ弥左清門カ

曰愚兄肥後守ヲ始烟ニ粉
レ附慕ニト欲ニケレ氏花
房助兵清堅ク制ニ城ニハ
後藤ト云フ銳將アリ懇ニ
慕上不觉ヲ取ヘカラスト
云ヘル故是ヲ追ホサリニ
ト谷ヲ寔ニ又兵清カ察ス
ルニ遠ハスト云ニ

